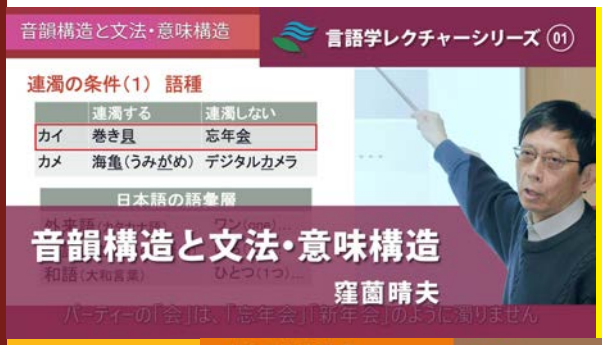
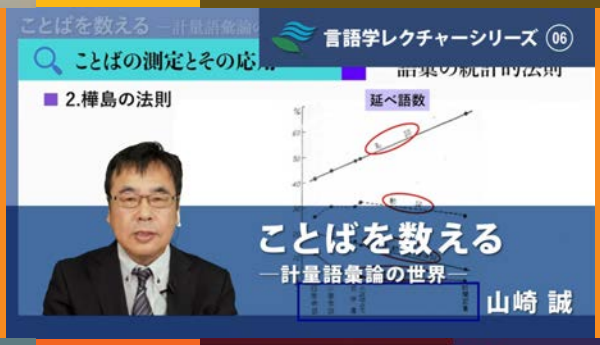
ISSN 2432-9207
国立国語研究所　研究情報誌

国語研 ことばの波止場

NINJAL Research Digest

vol. 9
2021. 3





特集

研究者コミュニティーに開かれた国語研

①領域指定型（公募型）プロジェクトの成果から
②研究情報発信センターによる調査データの公開

研究者紹介
著書紹介

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics
NINJAL

PROJECT

特集　研究者コミュニティに開かれた国語研①

日本語の不思議を科学する

日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得

村杉 恵子
MURASUGI Keiko

類型的特徴から見るヒトの言語

生成文法理論は、過去60年の研究を通して大きく発展しました。まず、個別言語の文法を規則の体系として整備することに始まり、提示された規則群を説明すべき対象とした「原理とパラメターの理論」に結実します。現在追求されている極小主義アプローチは、言語が言語として成立するために必要な最低限のメカニズムに基づいて原理群そのものに説明を与えようとする試みです。

Noam Chomskyの提示する現代文法理論は、以下の操作を中核に据えます。

(1) 併合：二つの要素αとβから構成素γ＝{α, β}を形成する。
(2) ラベル付け：併合によって形成されたγの性質を決定する。

併合は、例えば、他動詞Vと名詞句NPからγ＝{V, NP}を形成します。γはVとNPのどちらの性質を持つのでしょうか。γが主要部（語／形態素）と句を含む場合には、前者がγの性質を決定します。従って、γ＝{V, NP}はVPと解釈されます。γ＝{XP, YP}のように二つの句を含む構成素は、一定の条件下でラベル付けがなされます。文は、主語のNPと述部TP＝{T（時制), VP}を併合することにより形成されます。この場合には、「一致」よりTが主語の人称、数などを表すことから、γの中心となり、γの性質を決定します。

では、性や数などの「一致」を欠く日本語では、文はどのようにラベル付けがなされるのでしょうか。日本語の類型的特徴は、どのようなラベル付けのメカニズムを仮定すれば、説明されうるのでしょうか。

文法理論の発展は、ヨーロッパ系言語の記述的研究に多くを依拠しています。しかし、文法理論は、どの言語にも共通する普遍性のみならず、言語間変異をも説明するものでなくてはなりません。そこで、ヨーロッパ系言語と類型的に異なる日本語が注目され、日本語研究からの一般理論への貢献が期待されてきました。本プロジェクトは、この期待に応えることを目的として遂行されました。

研究成果

本プロジェクト「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」と、その前身である「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約」（2011～2014年度）の成果として、研究員20名によって数多くの論文が国内外の専門誌に発表され、また、以下の書籍も公刊されました。

(3) *Japanese Syntax in Comparative Perspective*, Oxford University Press, 2014, 336pp.
(4) 『日本語文法ハンドブック』開拓社, 2016, 474pp.
(5) *The Linguistic Review* 37巻1号（Special Issue: Japanese Syntax in Minimalist Perspective), Mouton de Gruyter, 2020, 172 pp.
(6) 『日本語研究から生成文法理論へ』開拓社, 2020, 320pp.

その中から、日本語の類型論的特徴を説明する研究の一部を紹介しましょう。

空項と「一致」

日本語の特徴として、広範な空項の分布があります。例えば、英語などの言語とは異なり、(7b)のように目的語が表われない文が許容されます。

(7) a. 太郎がそれを買ったんですか。
b. はい、太郎が _ 買いました。

黒田成幸（しげゆき）の博士論文（1965）以降、日本語には、音声を伴わない空の代名詞があり、(7b)の目的語も空代名詞であると考えられてきました。

空代名詞とは、どのような言語に存在するのでしょうか。研究史の中で、豊かな「一致」のあるイタリア語などの言語と日本語のように「一致」の全くない言語が、空代名詞を許容することがわかってきました。それはなぜなのでしょうか。

この問題を深める契機となったのは、本プロジェクトの研究員である奥聡の博士論文（1998）です。奥は、日本語の空項は、空代名詞である場合に加えて、英語の‘He did _’に見られるような動詞句省略と同様に、主語や目的語を省略することによって生じることを示しました。項省略として知られる現象です。

この発見を受け、本プロジェクトの研究員である斎藤衛（まもる）（2007）は、文法理論は、項省略が「一致」が欠如する場合にのみ許容されることを予測すると論じました。本プロジェクトでは、高橋大厚が中心となり、空項の研究に取り組みました。高橋は、まず、海外の研究協力者とともに、斎藤の予測を経験的に検証し、その成果を(3)に公表しました。さらに、(4)には、日本語における空代名詞を項省略によって生じるものとして捉え直す分析を発表しました。ここに、豊かな「一致」が空代名詞を可能にし、「一致」の欠如が項省略を可能にするという一般化と、これが文法理論の帰結として導かれるとする仮説が成立しました。現在も世界的規模で検証が続いています。

格助詞と述語活用の役割

本プロジェクトでは、日本語を特徴づける多重主語や自由語順などについても説明を深めました。

冒頭で述べたように、「一致」を欠く日本語文がどのようにラベル付けされるかが問題となります。この問いに答える仮説として、斎藤（2016）は、*The Linguistic Review*において、格助詞や述語活用の接辞が句をラベル付けにおいて不可視化すると提案しました。例えば、日本語の文は、γ = {NPが, TP} となりますが、「が」が主語を不可視的にするため、γ はTPとラベル付けされます。さらに、(8)に例示する多重主語文にも同様にラベル付けがなされます。

(8) 名古屋が一番道が広い。

主語以外の要素を文頭に移動し、文と併合することで可能となる自由語順も、同ラベル付けにより説明されます。目的語を文頭に移動すると γ = {NPを, TP} が形成されますが、「を」が目的語を不可視的にするため、γ はTPとラベル付けされます。この仮説は、二つの句が併合された場合のラベル付けメカニズムの相違が、言語間変異を生むことを含意します。

この仮説を検証し、発展させる研究も、研究成果には多く含まれています。この仮説を幼児の言語獲得データから検証したのが、(5)に掲載された村杉の論文です。言語獲得の初期に見られる様々な「文法的な誤り」が、母語のラベル付けメカニズムを獲得するための試行錯誤のプロセスとして分析されています。

文法論では、高野祐二が二重焦点化、奥が計量詞作用域、斎藤が以下に概観する連体修飾節に関する日本語の特徴を説明する論文を(6)に発表しています。

日本語研究では、連体修飾節の多様性がよく指摘されます。日本語では、以下のような例も許容されます。

(9) a. 誰かがドアを閉める音
b. 屋根が綺麗な家

このような例は、文（TP）と名詞句（NP）を併合することにより、γ = {TP, NP} として形成されると考えられます。日本語ではなぜこのような構造が許容されるのでしょうか。斎藤は、連体修飾節が連体形を有することに注目し、活用接辞がTPを不可視的にするため、γ はNPとしてラベル付けがなされると論じています。

科学としての言語学

言語学は、言語知識がどのようなものであり、ヒトがそれを自然に獲得できるのはなぜかを問う学問です。科学は、事実を見据え、その事実がなぜ生じるのかを問うことによって発展してきました。科学としての言語学も例外ではありません。

本プロジェクトは、日本語の「不思議」な類型的特徴について、新たな事実を発見しつつ、文法理論の発展をふまえて他言語との相違と相同に明確な説明を与えました。立川を基地とし、日本語分析を契機として、文法理論の発展に寄与することをめざしたチームといえるのかもしれません。この試みが、これからも国語研において引き継がれることを祈っています。

（南山大学・教授／村杉恵子）

PROJECT

特集① 研究者コミュニティに開かれた国語研①

新しい古典・言語文化の授業

古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究

河内 昭浩
KAWAUCHI Akihiro

新しい古典・言語文化の授業

2018年3月、新しい高等学校学習指導要領が告示されました。高等学校国語科の必修科目に、これまでの「国語総合」に代わり、「現代の国語」と「言語文化」という２つの科目が設定されました。この２つは、「国語総合」の「現代文」と「古典」とは異なります。「現代の国語」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」を中心とした科目として設定され、従来の科目「古典」の内容は、科目「言語文化」の中に吸収されています。

では科目「古典」と科目「言語文化」は同じかと言えば、やはり違います。科目「言語文化」は、「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めること」を目的としています。ご承知の通り、科目「古典」は、上代から近世までの文学作品を対象とした科目です。また科目「古典」では、「受け継がれてきた我が国の言語文化」という観点では構成されていません。読者の皆さんも、古典は、「(今とは異なる)昔のこと」として学習されてきたのではないかと思います。

そもそも「言語文化」とは何か。学習指導要領には、「我が国の言語文化とは、わが国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのもの」等と記されています。つまり「言語文化」の学びには、古典文学作品の読解だけではなく、「言語そのもの」の学びも含まれなければなりません。

皆さんは、科目「古典」の授業の中で、「単語」や「文法」の学習をされてきたと思います。しかしそれは、古典文学作品を読解するため、並びに大学入試対策のためであったことと思います。しかも学習する言葉の多くは、今はもう使われていないものであったのではないでしょうか。

これからの「言語文化」の学びには、現代まで受け継がれてきた言葉の学びが必要になります。本プロジェクトでは、そうした言葉の学びを取り入れた、新しい古典・言語文化の授業を創出するための研究を行っています。

日本語歴史コーパス（CHJ）には、上代から近代までの日本語資料が収録されています。学習指導要領の示す「言語文化」とほぼ同じ射程です。「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」も取り入れれば、通時の視点で言葉を捉えることが可能になります。CHJやBCCWJを活用することで、これまでにはない古典・言語文化の授業が作れると考えています。次節でその一端をご紹介します。

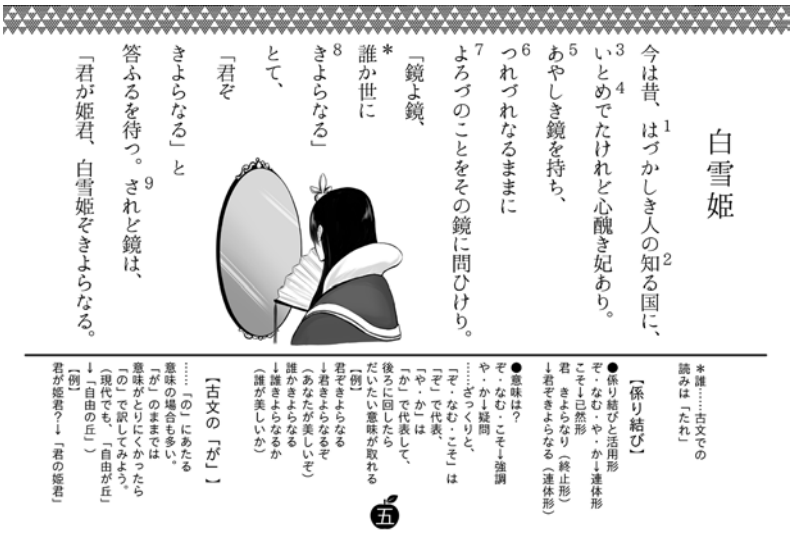
なおご紹介する授業実践は、拙編著『新しい古典・言語文化の授業』（朝倉書店）に掲載されています。詳細はそちらをご覧ください。

また、文科省のGIGAスクール構想が加速し、児童・生徒の手元に一人一台のPCやタブレットが置かれることになりました。授業におけるICTの活用はもはや特別なことではなく、ICTを活用することが授業の前提になりつつあります。そうした状況に対応し、コーパスを中高生がより使いやすくなるような国語教育用のインターフェイスを開発中です。次々節で紹介したいと思います。

コーパスを用いて授業を作る

（1）『枕草子』の教材研究

最初にご紹介するのは、『枕草子』の第一段「春はあけぼの」におけるCHJの使用例です。教材「春はあけぼの」では、「『春はあけぼの』の文章を模して自分なりの随筆を書こう」といった学習活動が、しばしば行われます。そこで学習者は、「冬はこたつ。」などといった文章を書くことが求められます。しかしCHJで検索す



ると、「あけぼの」の語は、『枕草子』以前には、『蜻蛉日記』で一例見られるのみで、かつ、『枕草子』中でも、「春はあけぼの。」の一文以外では用いられていないことが分かります。「冬はこたつ。」では、「春はあけぼの。」の一文が示す特異性を表現できたことにはなりません。

また別に、教材「春はあけぼの」を用いて、「形は同じでも今は意味が違っている言葉」などを調べる学習活動も行われます。文中の言葉がそれらに該当するかどうか、CHJを用いることで、根拠を基に判断をすることができます。このように、授業者が教材研究にCHJを用いることで、古典の学びを確かな言葉の学びにすることができるのです。

（2）『白雪姫』の単語帳

次にご紹介するのは、昭和女子大学の須永哲矢氏と学生諸子による「古典教材作成プロジェクト」です。図1をご覧いただくだけでも、この授業実践の魅力が伝わるのではないかと思います。

この授業実践では、まず、高校国語の教科書をテキストデータ化し、形態素解析を利用して語の集計を行い、学習に必要な古文単語を選定します。こうした作業、形態素解析や語の集計等はすでに読者の皆さんも多く行っていることと思います。この授業実践の秀逸なところは、選定した古文単語の学びを、オリジナルの古作文と単語帳作成へと昇華させている点です。ただ単語を覚えるのではなく、自ら例文と単語帳を作成していきます。しかも元となるお話に選ばれたのが「白雪姫」。実に魅力的な題材設定です。

古文「白雪姫」は、次の一文から始まります。「今は昔、はづかしき人の知る国に、いとめでたけれど心醜き妃あり。」この続きは拙編著、もしくは、「古典教材作成プロジェクト」のWEB公開ページをご覧ください。（http://zenkoren.itigo.jp/shirayuki/）

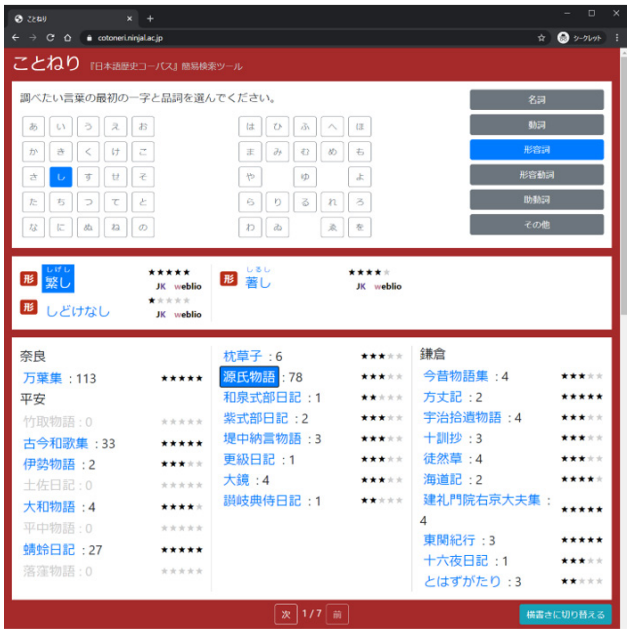
簡易検索システム「ことねり」

最後に、CHJの簡易検索システムである「ことねり」をご紹介します。「中納言」のユーザー登録をされている方は、現在すでに使用することができます。「中納言」にログインしたのち、「ことねり」のサイト（https://cotoneri.ninjal.ac.jp）を開いてみてください。五十音と品詞を選択できるタッチパネル画面が、そこに現れるはずです。図2は、「し」で始まる「形容詞」を検索し、そのうちの一つ、「繁し」をクリックした画面です。形容詞「繁し」が、CHJに収録されている各作品に何例出現するかが、一覧で表示されています。

さらに各作品名をクリックすると、指定した語の全用例と、活用形、章段が表示されるようになっています。さらに用例は、ジャパンナレッジに収められている新編日本古典文学全集と紐づけされていて、本文、現代語訳を確認することができるようになっています。

この「ことねり」は、研究用はもとより、中学高校の新しい古典・言語文化の授業において広く活用してもらうことを意図しています。上代から近現代までつながる言葉の学びのツールとして活用してもらいたいと考えています。GIGAスクール構想の加速により、日々の授業での活用が一気に現実的になってきました。国語教育におけるコーパスの活用研究の裾野は広がってきています。ご関心を持っていただける方がさらに増えることを期待しています。

（群馬大学・准教授／河内昭浩）



PROJECT

特集　研究者コミュニティに開かれた国語研①

学習者の「打つ」をサポートする

「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発

小林 ミナ
KOBAYASHI Mina

「書く」から「打つ」へ

私たちの日常生活を振り返ると、日本語を「(手で) 書く」機会よりも、「(キーボードやタッチパネルで) 打つ」機会のほうが、圧倒的に多くなっていることに気づきます。「書く」から「打つ」への移行だけでなく、以前なら電話で伝えていた用件を、電子メールやLINEで伝えるようになるなど、「話す」から「打つ」への変化もみられます。日本語が適切に打てる力というのは、社会生活を営む上で今後もますます重要になっていくことでしょう。

このような状況は日本語学習者（＝第２言語／外国語[注1]として日本語を学んでいる人。以下「学習者」）にとっても同じです。

このプロジェクトでは、学習者が日本語を「打つ」ことを学べるようなウェブ教材の作成を目指し、次のような基礎研究を行いました。

1. 現実のコミュニケーションにおいて、国内外の学習者はどのような状況で何を日本語で「打つ」のか。
2. そこでは、どのような言語／非言語のスキルが使われているのか。
3. 学習者にとって、日本語を「打つ」ことの何が難しいのか。

学習者には、すでに母語や既習外国語でパソコンやスマートフォンといったデジタル機器を使いこなしている人も数多くいます。そのような人に対するサポートは、これらのデジタル機器の使用に不慣れな日本人へのサポートとはまったく異なる視点でデザインされなければなりません。

「フィリピン」と打つには?

具体的には、デジタル機器に慣れた学習者には、「電源のオン／オフ」「ファイルの保存や転送」といった機器操作の説明はまったく不要です。

しかし、どうすれば「」、『』、{}、【】といった２バイトの記号を出力できるのか、これらは日本語でどのように使い分けられているのかといった情報は非常に重要です。あるいはHACHIとタイプした後、どうすれば「八」「鉢」「蜂」「ハチ」といった日本語表記を選択・確定できるのか、「フィリピン」と打つときに、なぜPHILIPPINEとタイプしたのではダメなのか、といった日本語入力の仕組みについての説明も必要です。

また、「今日は日曜日です。」と打ちたいときに、どのタイミングでスペースバーを押せば、効率よく漢字かなまじり表記に変換できるのかといった点については、「単語」「文節」「文」といった言語構造とあわせて、原則を説明する必要があります。こういったサポートに日本語教育の視点は欠かせません。

LINEの文法

もちろん、サポートが必要なのは、機器操作だけではありません。このプロジェクトで行った調査によれば、学習者には、同じ学生寮に住んでいる日本人学生と留学生10数名で作っているグループLINEに「めし行く人！」という書き込みがあったとき、日本人学生は全員が「食事に誘われている」と理解したのに対し、留学生は誘われていると理解できませんでした（小林2019）。このことは、「グループLINEに現れる「めし行く人！」は勧誘の機能を持つ」といったように、単なる名詞句を越えた一定の規則性（＝文法）が存在することを示しています。

また、学部留学生と日本人チューターとの間でやりとりされた「学内での待ち合わせ」に関するLINEの書き込みを分析したところ、「今日来る？」

「いま行く」「向かいます！」といった短い書き込みで使われている移動動詞の選択や解釈には、「移動の方向性」といった従来の文法研究で指摘されている要因以外に、「キャンパスの広さ」「互いの居場所」「待ち合せ場所に着くまでにかかる時間」「「すぐに待ち合せ場所に向かえるかどうか」といった自分自身の状況」などの要因が関わっていることが明らかになりました。また、このような移動動詞の使用について、学部留学生にフォローアップインタビューを行ったところ、使われている移動動詞を手がかりに相手の居場所を把握することには成功していないことがわかりました（副田・大和 2018）。

このような研究成果からは、即時性、双方向性、移動性といった特性を持つデジタル機器で使われる日本語の背景には、従来とは異なる動的な文法が存在している可能性があることが示唆されます。

ピラニアを探しにアマゾン河へ

このプロジェクトのキーワードは「状況」です。ことばを、使われた具体的な「状況」から切りはなさずに観察するというアプローチをとっています。

言語研究には、「形態論（morphology）」「統語論（syntax）」のように、基本的に言語のみを研究対象にするものと、「語用論（pragmatics）」のように「言語が使われている状況」まで視野に入れるものがあります。「言語のみを研究対象にする」というアプローチの前提には、自然な状況で使われていることばから、ことばだけを切り離し、その個別具体性を取り除くことによって、言語の抽象的な「文法」が記述できるという考え方があります。

その一方、ことばが使われている個別具体の状況から、ことばだけを切り離し、「文法」を記述することはできないという考え方があります。なぜなら、個別具体の状況と「文法」とは、そもそも分離不可能なほどに絡み合っているからです。このような考え方は、次のような比喩によって説明されることがあります[注2]。

アマゾン河に棲息するピラニアについて知りたいとする。捕獲して、実験室に運び、解剖したり、薬剤に反応させたりすれば、そのピラニアの基本構造、身体組成などは明らかにできる。大量に捕獲して計量すれば、大きさや重さの平均値を知ることもできる。しかし、そのピラニアがアマゾン河でどのように生息し、どのように活動しているかといった生態の全貌は、アマゾン河の中で観察しなければわからない。ここでいうピラニアは「ことば」、アマゾン河は「ことばが使われた個別具体の状況」を意味しています。この比喩の助けを借りるなら、「「状況」から出発する日本語教育」というのは、「ことばを実験室に運び込むのではなく、使われた状況の中で観察、記述し、その成果を踏まえてデザインされた日本語教育」と言い換えることができます。個別具体の状況は無限ですので、それらをすべて事前に観察、記述することは、原理的には不可能です。それにも関わらず、私たちは初めて遭遇する状況において、語や表現や文型を選び出し、（その成否はともかく）自らのことばを組み立てています。これは即ち、個別具体の状況は無限であっても、そこでのことばの使われ方には、有限の社会的合意（＝文法）があることを示しています。社会的合意には、緩やかなものから、かなり確立された厳しいものまで段階性があり、ことばの使い手としての私たちは、社会経験を重ねる中で、帰納的、演繹的に広狭さまざまな文法を学んでいるのでしょう。このような言語観、文法観に立つのであれば、日本語教育においても、無限の個別具体の状況にあることばを状況に置いたままで観察、記述し、有限の社会的合意（＝文法）に還元していくことが必要になります。

注１　「日本で日本語を学ぶ」といったように、目標言語が使われている環境で学ぶ場合を「第二言語」、そうでない場合を「外国語」と呼びわけることがあります。

注２　柳町智治氏（北星学園大学）の私信による。

小林ミナ（2017）「状況から出発する」アプローチ『早稲田日本語教育学』22、101-113.
小林ミナ（2019）「「状況」から出発する日本語教育」『早稲田日本語教育学』27、i – vii.
副田恵理子・大和えり子（2018）「『書く』言語的スキルとは―ＬＩＮＥによる待ち合わせ場面の分析から」、「「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発 第２回公開研究会」（2018.1.28、於国立国語研究所）

（早稲田大学大学院日本語教育研究科・教授／小林ミナ）

PROJECT

特集　研究者コミュニティに開かれた国語研②

広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～

「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」のデータ公開

鑓水 兼貴
YARIMIZU Kanetaka

国語研の社会調査研究

国立国語研究所では創立より社会調査による研究を数多く行っています。新聞の世論調査のように大量の人々に対して行う調査で、所員が調査を担当することもあれば、調査会社に委託することもあります。代表的な調査としては、山形県鶴岡市で1950年から約20年おきに4回実施している「鶴岡共通語化調査」や、世界28か国で3万人以上の人を対象とした「日本語観国際センサス」などがあります。これらの調査結果は報告書や論文などで見ることができますが、結果を自分で検証してみたいという人もいるのではないでしょうか。国立国語研究所研究情報発信センターでは、これまでの調査データを公開しており、自由に利用することができます。ここでは、最近公開された「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」のデータの分析例を紹介します。

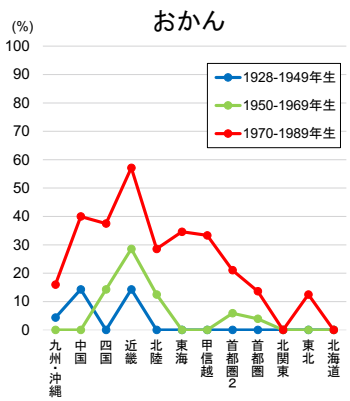
関西弁の広がり

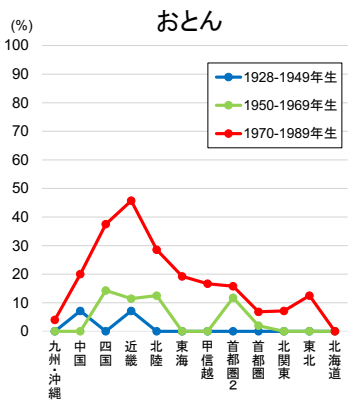
テレビやインターネットでは方言の話題を多くみかけます。伝統的な方言は衰退する傾向にありますが、地域の言葉の違い自体はこれからも保たれるでしょう。共通語の発信源ともいえる東京の言葉の影響力は絶大ですが、第二の都市である大阪の影響も見過ごせません。実際、大阪から東京に入ってくる言語現象は数多くあります。近年では「めっちゃ」が代表格といえます。2000年頃は東京の人がよく知っている関西弁の代表として「めっちゃ」が挙がっていました。2010年頃には全国の若者に普及し、現在では「めっちゃ」が関西弁だと思わない若者も多いようです。そのくらい一般的になっています。

「おかん」「おとん」の広がり

「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」でも、関西弁の広がりに関する調査項目があります。2009年3月時点で20歳から79歳までの男女を対象に、全国73地点925人を対象とした調査です。各都道府県で原則として10歳刻みに6世代、男女がそろうように設計されており、世代別、性別の各都道府県での言葉の使用をみることができます。

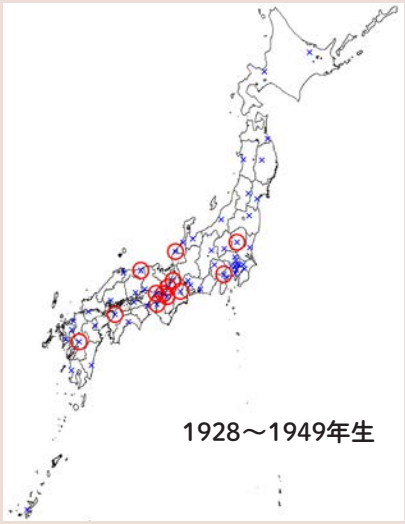
調査項目に関西弁の親族呼称として有名な「おかん（お母さん）」「おとん（お父さん）」があります。最近は関西以外でも聞かれるようになりました。集計結果をみてみましょう。他の地域から移住した人が入ると分かりにくくなるので、主に小・中学校時代に最も長く住んだ都道府県が、調査時点で住んでいる都道府県と同じ人を「地元出身者」とみなし、この人々の回答を集計しました。また、世代は20年ごとに区切り、3世代を地域別に集計しています。

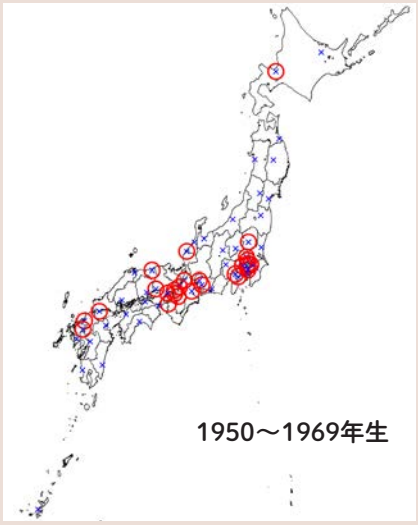


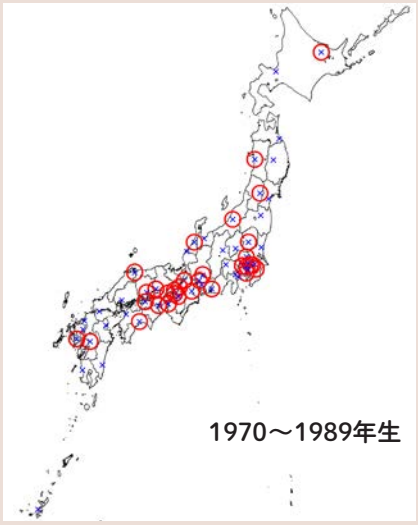


「なんでやねん」の使用

○使う　×使わない



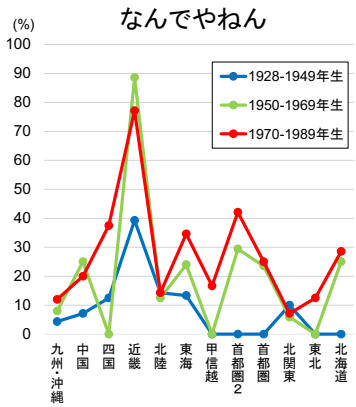




左は「おかん」、右は「おとん」のグラフで、若干「おかん」のほうが多く使われているようです。西高東低で、近畿地方を中心に山ができており、離れるほど使用率が低くなっています。1970～80年代生まれの人の使用者が多く、他の世代は低いといえます。もともと近畿地方でも一部で使用されていた「おかん」「おとん」が、近畿地方での使用が増加するとともに、周辺地域へと広がっているようです。

「なんでやねん」の広がり

別の言葉を見てみましょう。相手が変なことを言った（ボケた）ときに、それに対して「なんでそうなるんだ」「なんだそれは」のように注意することを「ツッコミ」といいます。



漫才などでよく見るものです。関西の人以外でも見られる言語行動ですが、関西のお笑いの影響もあってか、関西以外の人が「ツッコミ」をするときに、関西弁の「なんでやねん」（「役割語」と呼ばれる）を使う人も多いのではないでしょうか。

「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」では、相手の言ったことに対して「何でやねん」と言い返すことがあるか、という質問をしました。さきほどと同じように集計結果をグラフであらわすと、西高東低ですが首都圏の山は大きく、また、近畿地方の中も世代ごとに増加していることがわかります。

そこで結果を地図で示してみました。「地元出身者」の回答を地点ごとに示した地図のことを「言語地図」といい、方言研究で用いられています。世代別の地図をみると、「なんでやねん」が1920～40年代生まれでは主に近畿周辺だったのが、1950～60年代生まれになると首都圏で急増し、1970～80年代生まれでは全国に広がっています。将来、「めっちゃ」のように、「なんでやねん」も関西弁と意識されなくなるかもしれません。

自分でデータを加工してみよう

これまでの説明を見て、「性別による違いを知りたい」「世代や地域の分け方を変えたい」などと思った方もいるでしょう。こうしたグラフや地図は、調査結果のデータを自分で加工して作ることができます。国立国語研究所研究情報発信センターでは公開データにライセンスを明示して、データ利用の促進をはかっています。「クリエイティブ・コモンズ表示4.0ライセンスCC-BY」と表示されているデータは、国立国語研究所のデータであることを明記をすれば、複製、再配布、改変といった、どのような目的でも使用可能です。「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」のデータもCC-BYです。自由に使用して役立てていただければと思います。

国立国語研究所研究情報発信センター配布コンテンツ
https://mmsrv.ninjal.ac.jp/
クリエイティブ・コモンズ・ジャパン
https://creativecommons.jp/

（国立国語研究所・プロジェクト非常勤研究員／鑓水兼貴）

「ブレーキ踏んでた！」はなぜ運転手しか言えないのか

～発話の権利～

定延利之 SADANOBU Toshiyuki

ドライブに行こうと、皆でレンタカーに乗り込んだが、なぜか車は動かない。「燃料は入ってるよね」「キーは刺さってるな」などと、車内の皆で原因を探るうち、車内の１人が原因を発見する。なんと、運転座席にすわっている父親が、アクセルと間違えてブレーキを踏んでいるのである。

この時、原因を発見した者が父親の足を指しながら「あ、ブレーキ踏んでた！」と言ったとすれば、それは基本的に父親自身である。

発話の自然さを日本語の母語話者（10代～70代以上115名）に5段階で評価してもらった、アンケート調査の結果を示そう（1点：最も不自然、5点：最も自然）。父親の「あ、ブレーキ踏んでた！」発話は高評価（平均4.4点）である。だが、後部座席の子供が父親の足を指しながら言う「あ、ブレーキ踏んでた！」発話は低評価（平均2.2点）である。

子供の「あ、ブレーキ踏んでる！」発話は問題ない（平均4.7点）。それなのに、「あ、ブレーキ踏んでた！」発話は父親以外だと言いにくい。どういうことだろうか？

車内の人間たちは、［車が動かない原因は不明（少なくともペダルの踏み間違いではない）］という知識を心内に持っている。だが、父親がブレーキを踏んでいることに気づけば、［車が動かない原因はペダルの踏み間違いだ］という新知識を得る。そして、いままで持っていた知識を、この新知識に更新する。これは簡単な作業である。だが、それは心内でおこなう作業の話である。

心内で人知れず作業（知識を更新）することと、発話をとおしてその作業をあからさまにおこなうことは、別である。前者は誰でも簡単にできる。だが、問題の「た」発話は後者に属する。破棄すべきことが明らかとなった、これまでの自分の古い知識に思いを馳せ（それで過去の「た」が現れる）、「正しくはこうだった」と、それをあからさまに更新してみせる行動である。

(「あからさま」「〜してみせる」とはいっても、必ずしも意図的ではないことを断っておく。)

これは基本的に父親にしかできない。なぜか？　運転座席に座っているのが父親だからである。いまコミュニケーションの場に発生している問題［車はなぜ動かないのか？］を自分の問題として引き受け、なんとか解決をはからねばならない、この問題の「責任者」だからである。(後部座席の子どもでも、車が動かないことを、よほどきもちを込めて不思議がり、自分のこととして原因を探し回っていたなら、「責任者」の仲間入りを果たしているので、「あ、ブレーキ踏んでた！」と言えるだろう。「基本的に」父親、と述べているのは、この意味である。)

「た」と同じことは、「えーと」のような、考え中の発話にも観察できる。心内で考えることは誰にでもできる。だが、「えーと」と言って皆の前であからさまに考えてみせることは、「責任者」にしかできない。

たとえば「190円と160円で、えーと、350円ですね」のように、発話している最中の話し手が「えーと」と言うことは自然である（平均4.5点)。話し手は、いまコミュニケーションの場に発生している問題［次に何を言うべきか？］の「責任者」だからである。

また、それまで黙っていた者が、「えーと、それ、ちょっと違うんじゃないですか」と、「えーと」発話を皮切りに、異議をとなえ始めることも、(多少失礼な言い方ではあるが) 自然である (平均4.0点)。これは、それまでの話し手を差し置いて、コミュニケーションの場に生じた問題を引き受ける「責任者」の立場を自ら買って出る発話である。

さらに、「どう思いますか、〇〇さん？」と、先生に当てられてしまったが、何を言えばよいかわからず、話すつもりもない生徒が、自分には見切りをつけて早く他の生徒を当ててくれという、いわば「パス狙い」で、「えーと…」と言ったきり黙りこくるということも、(決して褒められたことではないが) 一応自然である（平均3.8点)。これは、意に反して先生から「責任者」の立場を割り当てられてしまった発話である。

以上のケースに該当しない者たち、つまりコミュニケーションに参加して議題を真剣に考えてはいるが、意見を述べるつもりはなく、期待もされていない「外野」の者たちは、「えーと」と言うこともあまり自然ではない（平均2.6点)。

「発話の権利」と言えば、「他人の話に口出しするな」「割り込むな」などと取りざたされる面があることは、よく知られている。だがそれとは別に、コミュニケーションの場に発生する個々の問題ごとの、動的なものもあると考えてもよいのではないか。

※本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金（基盤（S)20H05630）の成果を含んでいる。

文献

定延利之（編）2020『発話の権利』東京：ひつじ書房

さだのぶ としゆき●京都大学文学研究科 教授。専門分野は言語学・コミュニケーション論。

研究者紹介 018

野田 尚史

日本語教育研究領域 教授

目的に合わせた さまざまな文法を求めて

のだ ひさし●1956年，金沢市に生まれる。大阪外国語大学の学部でスペイン語，大学院で日本語学を学ぶ。博士（言語学）。大阪外国語大学助手，筑波大学講師，大阪府立大学助教授・教授を経て，2012年から現職。

── 研究者になったきっかけは？

いろんなことが積み重なってでしょうね。高校の理数科でプログラミングを学んで計算機に翻訳をさせたいと思ったり，大学のときにメキシコ人の留学生から「は」と「が」が難しいと聞いて日本語に興味を持ったり，久野暲の『日本文法研究』を読んで感激したり……。

大学院の入試のときには寺村秀夫先生がいてはったんですが，入学すると他大学に移ってはったんで，正式な師弟関係はありません。でも，寺村先生が『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』の原稿をホテルに缶詰になって書きはるときに声がかかり，修士課程を出たばかりの私が隣の部屋でその原稿を読んでコメントするということをしました。そういうことをしているうちに，日本語文法の世界に引き込まれました。

大学院に入るときは，スペイン語で日本語の文法書を書くのを一生の目標にしていました。幸いに最初の就職もスペイン語で国費留学生に日本語を教える仕事でした。そのあたりが研究と教育の出発点です。

── これまでどのような研究を？

卒業論文も修士論文も日本語とスペイン語の対照研究で，文の主題をテーマにしました。いわゆる「は」と「が」の問題です。スペイン語には「は」も「が」もないんですが，その違いを語順で表しているという研究です。

その後は，自分がしようと思っている研究は締め切りがないので，ぜんぜん進まなくて，誘われたり頼まれたりした発表や原稿をこなし続けてきた感じです。成り行き任せですね。

私の若いときは現代日本語文法や日本語教育の研究が急に盛んになってきた時期で，でも，まだ研究者が少なかったので，実績がない20代の若造にもいろんな仕事が回ってきました。

日本語教育学会の『日本語教育』から「副詞の特集号に副詞についての原稿を」と言われたり，明治書院の『日本語学』から「複合辞の特集号に「～にちがいない／～かもしれない／～はずだ」の原稿を」と言われたり……。まったく考えたこともなかったテーマばかりでした。寺村先生からは留学生が日本語の文法を独習できる『日本語文法セルフ・マスターシリーズ』を出したいと言われ，「は」と「が」の使い分けを扱う第1巻を書きました。

そういういろんな注文に応えているうちに，研究範囲も，ヴォイス，モダリティ，とりたて，複文，文章・談話などに広がっていき，日本語教育やコミュニケーション，歴史的研究にかかわる研究も増えていきました。

── 今，関心を抱いているのは？

国立国語研究所では，日本語教育と対照言語学のプロジェクトにかかわっています。

日本語教育のほうでは，日本語学習者の読解と聴解で，どんなところに引っかかるのか，それはなぜかという研究をしています。そういう研究をもとに，「学習者が日本語を読むために必要な文法」，「学習者が日本語を聞くための文法」を作りたいと考えています。

たとえば，「「[名詞] が」が出てきたら，それはその後，最初に出てくる動詞や形容詞にしか係っていないよ。その動詞が「～ながら」や「～まま」などだったら，そこを通り越してそれより後の動詞や形容詞まで係っていくけど」といった文法です。「は」と「が」の使い方は初級段階で必ず習いますが，中級や上級になっても，日本語を読むときに，「～は」も「～が」も同じように文の最後まで係っていくと思っている学習者が多いです。

対照言語学のほうは，「だけ」や「さえ」「も」などの日本語のとりたて表現が他の言語でどのように現れるかという研究をしてきました。今はそれを広げる形で，主題や焦点について日本語と他の言語の対照研究を進めています。

対照研究というと複数の言語を比べるというイメージですが，現代日本語と古代日本語の対照研究や，日本語の方言どうしの対照研究も，たくさんの方に協力してもらって進めています。

── 今後の研究についてお願いします

若いときは未来が無限に広がっている気がしていましたが，だんだんそうでもなくなってきました。でも，まだやり残したことがあります。

大きく言えば，「目的に合わせた文法」ということです。さきほど学習者に必要な「読むための文法」，「聞くための文法」のことを申しましたが，「書くための文法」や「話すための文法」も必要です。そのほか，母語話者向けの文法とか，人間の言語に共通する原理を明らかにする文法なんかも……。それぞれの文法は，互いに大きく違うものになるはずです。

私ができることは限られていますが，多くの人に「目的に合わせたさまざまな文法が必要だ」と思ってもらえるようになれば，若い人たちも新しいテーマをどんどん見つけられるようになり，仕事に困らなくなると思います。

研究者紹介 019

木部 暢子

副所長・言語変異研究領域 教授

言語の保存の最も理想的な形をめざして

きべ　のぶこ●1955年福岡県出身。九州大学、同大学大学院で日本語学を学び、純真女子短期大学、福岡女学院短期大学、鹿児島大学での勤務を経て、2010年より現職。専門は日本語の音韻・アクセント、消滅危機言語・方言に関する研究。

── 研究の道に進んだきっかけは？

高校時代、国語が好きだという単純な理由で大学の文学部に入りました。特に「万葉集」が好きだったので、開講されていた「万葉集」の講義を受講しました。講師は、『上代国語音韻の研究』の著者、森山隆先生です。半年間で2首しか進まないという脱線の多い授業でしたが、その脱線がじつに魅力的。定まった読みのない歌が多いことや奈良時代の発音が現代の発音と違っていたことなどを知りました。特に興味を引かれたのは、文献資料からどうやって奈良時代の発音を復元するかです。それで、卒論では上代日本語の音韻の研究をしたいと思いました。しかし、すぐに挫折しました。橋本進吉、有坂秀世など偉大な研究者が山ほどの研究成果をあげていて、勉強すればするほど自分にできることなどもう何もないと思えてきたのです。

そのころ、研究室にはアクセント研究がご専門の奥村三雄先生がおられ、平曲譜本（琵琶法師が語る平家物語のメロディーを写した譜面）の研究をなさっていました。やはり同じように、文献資料から当時のアクセントを復元する研究に心を引かれました。そこで私は、平安時代の辞書『類聚名義抄』に付された声点（アクセント符号）から当時の複合語のアクセント規則を推定するというテーマで卒論を作成することにし、無事卒業しました。

── これまで、どんな研究を？

しかし、この研究にもやがて限界を感じます。文献資料に書かれていることは、言語全体のごく一部にすぎません。「不在証明はできない」と言いますが、文献に用例がないからといって、平安時代にそれがなかったとは言えないのです。それなら、不在証明ができるような研究をしようと思い、方言の調査研究を始めました。方言なら「ない」ものは「ない」と答えてくれる人がいます。また、方言調査では文献資料に出てくる古いことばに出会えることがあります。これも方言調査の魅力でした。

転機は1988年に訪れます。鹿児島大学赴任です。鹿児島といえば、平山輝男先生のご研究以来、型の区別が2種類しかない二型（けい）アクセントとして知られている地域です。鹿児島にいた22年の間に南九州、トカラ列島、奄美群島などいろいろなところを回りました。

ゴンザ資料との出会いも大きな転機となりました。ゴンザというのは、18世紀初頭にロシアへ漂流した薩摩の少年です。彼がサンクトペテルブルクで作成した薩摩語資料が現在、ロシア科学アカデミーに所蔵されています。最初に発見したのは九州大学の村山七郎先生ですが、鹿児島市在住の吉村治道氏の働きかけにより、1994年に全資料のマイクロフィルムが鹿児島県立図書館に収められました。私はこの資料から当時のアクセントを復元してみることにしました。結果は現代の鹿児島式二型アクセントとは異なり、屋久島の二型アクセントや長崎の二型アクセントに近いものでした。フィールドワークによる研究とゴンザ資料による研究を合わせて書いたのが、2000年の『西南部九州二型アクセントの研究』です。

── 現在行っている研究は？

2010年に国立国語研究所に着任してからは、消滅危機言語・方言の記録・保存の研究を行っています。2009年のユネスコの “Atlas of the World's Languages in Danger”（世界消滅危機言語地図）第3版を受けての研究ですが、鹿児島大学在職中の方言調査の延長線上にあるものです。

消滅危機言語の研究とはどのようなものかというと、その言語が消滅しても復元が可能なくらいの資料を作成しておくという研究です。そのために、辞書、文法書、談話テキストのいわゆる3点セットを作ります。音声や動画も収録して、解説やタグを付けておきます。国語研のプロジェクトが3点セットの見本を作成し、多くの人がこれを参考にして、各地の言語を記録してくだされればと思っています。

── 今後やりたいことを教えてください

言語の保存の最も理想的な形は、子どもたちが地域の言語を自由に話せるようになること、そのような環境が代々受け継がれることです。ただ、これは研究者がやることではなく、地域の人たちが、自分たちの地域をどうしたいかを考えた上で実施することです。これからはそのお手伝いをしていきたいと考えています。

調査風景（与論民俗村にて 2017年7月20日）

研究者紹介 020

五十嵐陽介

言語変異研究領域 教授

未開拓の分野を見つけて そこに切り込んでいきたい

いがらし ようすけ●1976年東京都出身。東京外国語大学大学院で博士号取得。広島大学文学研究科などを経て、国立国語研究所には2020年10月から在籍。日本語・琉球語の韻律を中心とした言語現象の実証的研究に取り組む。日本ロシア文学会賞（2005年）、日本音声学会優秀論文賞（2013年、2017年）、同発表賞（2017年）。

── 研究の道に進まれたきっかけを教えてください

言語に興味を持ったきっかけの1つは中学生の時に行った修学旅行です。京都・奈良に行く中学校が多い中で、私たちの中学校は東北地方に行きました。そこで農業体験をしたのですが、農家の方々が方言をしゃべっておられる。「牛の背中」のことをベゴノシェナガと言っておられる。農業体験それ自体よりも、そのあとで食べたわんこそばよりも、方言のことが強く印象に残りました。

中学生時代は外国語に興味を持ち始めた時期でもあります。YouTubeなどなかった時代なので、外国語を聞くためにはNHKのテレビ・ラジオ講座を利用していました。特に外国語の発音が好きでうまく発音できるようにたくさん練習しました。言語学、とりわけ音声学への関心は中学時代に芽生えたと思っています。すっかり外国語好きとなったので、外国語をたくさん勉強できる東京外国語大学に入学しました。そこではロシア語を専攻しました。日本ではあまり学ぶ人がいない言語であることがロシア語を選んだ1番の理由だったと思います。大学にはたくさんの優秀な言語学者の先生方が講義を持っておられ、様々な言語の話、言語学の話を聞くことができました。それでますます言語学が好きになりました。

── これまでどのようなご研究をされていましたか

アクセント・イントネーションを中心に研究してきました。そのきっかけは、大学生時代にモスクワに留学しときに、ロシア語音声学の大家にロシア語のイントネーションを教わったことです。ロシア語ではyes-no疑問文と平叙文とが基本的にイントネーションだけで区別されるのでイントネーションを習得することが重要となります。授業では、第2言語学習としてイントネーションを教わったのですが、理論的なことも同時に教わりました。帰国後、ロシア語イントネーションを研究テーマとして定め大学院に進み、このテーマで博士論文を書きました。

大学院時代には国立国語研究所が当時開発していた『日本語話し言葉コーパス』の構築作業にアルバイトとして従事する機会を得ました。そこではコーパスにイントネーション情報を付与する作業を行っていましたが、これにより日本語のイントネーションについて学ぶことができました。同時期に、日本語諸方言のイントネーションにも興味を持ち、友人を通じて知り合った人々に対してフィールドワークのまねごとを行っていました。このような経緯があり、大学院修了後には日本語諸方言のイントネーション研究を本格的に始めました。

ポストドクターの時代に宮古島のフィールドワークに誘われました。そこで初めて生の琉球語に触れたのですが、これは衝撃的でした。遠く海を越えてやってきた宮古島は気候も違うし、建物も違う外国のようで、そこで用いられていることばは聞いても何一つわからない外国語のようでした。これは長い時間をかけて琉球語と日本語の間の違いが大きくなったためですが、宮古島のことばを言語学の手法で分析してみると、音の体系において日本語と規則的な対応関係（音対応）があることがわかります。当の母語話者も意識しようのない抽象的なレベルでの音対応が、さらに意識しづらいアクセントにまで観察されることを自分の手で確かめたときは強い衝撃を受けました。もちろん論文を通じてこの事実は知ってはいましたが、本で知識を得ることと、実際に体験して知識を得ることの間には大きな違いがあります。これ以降、アクセント体系の研究、その歴史的変化の研究も行っています。

── 今はどのようなことにご関心があるのですか

これまでと同様に、日本語・琉球語諸方言の多様性の背後に潜む規則性を、特に音声面に焦点を当てて、実証的に明らかにする研究に関心があります。フィールドワークを通じてデータを収集し、それを実験的手法に立脚して分析し、理論的研究に貢献することをこれまで目指してきましたが、これを今も継続して行っています。私はフィールドワーカーとしても実験屋としても理論屋としても半人前ですが、その全部を組み合わせて誰もやってこなかったようなことに取り組めば、一人前の仕事ができるのではないかと考えています。

── 今後のご研究について教えてください

今後も変わらず音声面に焦点を当てた日本語・琉球語諸方言の研究を行っていきたいと思っています。私は人と同じことをやるのが苦手な性格なので、未開拓の分野を見つけてそこに切り込んでいきたいと考えています。未開拓の分野の研究成果を人に理解してもらうことは容易ではないので、実証性を特に心がけて研究を行っていきたいと思っています。

Book Review 著書紹介

成人教育 (adult education) としての日本語教育

在日パキスタン人コミュニティの言語使用・言語学習のリアリティから考える

福永由佳

ココ出版
2020年10月

近年、言語形式の習得のみを目指すのではなく、「社会参加」にも考慮した日本語教育の実践が増えてきています。しかしそこでも、「社会参加のためにはまず日本語を習得させてあげないと」という発想は根強く残っているようです。

本書は、在日パキスタン人コミュニティでの質問紙調査や丹念なインタビュー調査等を通じ、彼らが日本語能力の多寡にかかわらず、日本語以外の資源も活用しながら、一般的な日本人よりはるかに主体的に社会と切り結んでいる様子を、リアリティをもって活写しています。彼らのこうした生き方は、日本語学習者は「弱者」であるとする固定観念に大きな問い直しを迫るものです。

真の社会参加とは何か。それは日本語を学び、日本人に合わせて振舞う、という受動的行為ではなく、日本社会に働きかけ、必要あればよりよいものに変えていくことまでを含んだ、高度に主体的・能動的な生き方であるといえます。成人に対する日本語教育とは、そうした主体性の促しに焦点を当てるべきであり、かつそれは非母語話者だけでなく、母語話者にも向けたものでなければならない、という本書の主張は、言語教育に関わる者に対する力強いメッセージとなっています。

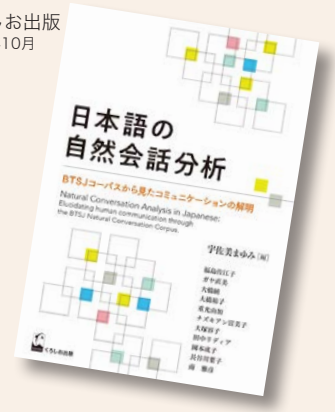
▶宇佐美洋（東京大学）

日本語の自然会話分析

BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明

宇佐美まゆみ 編

くろしお出版
2020年10月



本書の副題にある「BTSJコーパス」は、会話参加者の年齢や性別などが統制されていること、定量的だけでなく定性的な分析にも活用できることが大きな特徴であろう。本書編者の宇佐美氏が本コーパスの生みの、そして育ての親であるが、長年日本語ポライトネス研究に従事してきた同氏だからこそなし得た偉業である。

同氏も「はじめに」で述べているが、本書では国内外で活躍する様々な分野の料理人（研究者）が食材庫（本コーパス）の食材をそれぞれの調理法（方法論）で料理しており、様々な味（様々な本コーパス活用の可能性）が楽しめる。ただし、この斬新な試みのため、食材庫の食材をつまみ食いしただけのものや付け合わせに使用しただけの料理人もおり、食材庫の食材の特徴を十分に味わいたい人には少し物足りないかもしれない。

メインディッシュに本コーパスを用いた料理を味わいたい方は、同氏編の『自然会話分析への語用論的アプローチ』（ひつじ書房）がおススメである。これら2冊で、食材庫の食材の調理法、そして料理のおいしさが一通り分かったら、あなたもお好みの調理法で料理に腕をふるってみてはいかがだろうか。食材庫の食材は無償提供されている。

▶西郷英樹（関西外国語大学）

段落論

日本語の「わかりやすさ」の決め手

石黒 圭

光文社
2020年2月

1950年に時枝誠記が文章論を提唱して以来、文章の成分としての「段落」研究は、「段（文段・話段）」の研究へと発展的に継承され、今日においても文章・談話論研究の中心的なトピックであり続けている。本書の筆者は、先行研究で様々に定義される「段落」を実用の観点から整理し、「わかりやすさを重視したコミュニケーション」のための『段落論』を展開する。

本書は、文章と談話の表現と理解（「読む・書く・聞く・話す」）において「全体（構え）」と「部分（流れ）」を意識することが重要だとし、この「全体」と「部分」とをつなぐために、階層構造を有した「フォルダとしての段落」が有効であると論じる。全体の構成（発想）から実際の言語表現（文字や音声）に至るまで、豊富な実例とともになされる説明は、長い文章や談話のコミュニケーションが苦手だという人だけでなく、学生の不可解な改行（形式段落）に悩まされながら日々作文指導に奮闘する人にも、多くの実用的なヒントを与えてくれる。「段落」の現状を見渡し、インターネットの普及による「形式段落」の変容には人間の思考に深い影響を及ぼす時代性が反映されているとする筆者の指摘は、我々読者をさらなる議論に呼び込む起点となるだろう。

▶宮澤太聡（中京大学）

編集後記

『ことばの波止場』第九号をお届けします。今回の特集は「研究者コミュニティーに開かれた国語研」で、二種類の記事を載せています。1つは、「領域指定型（公募型）プロジェクト」の紹介です。これは国語研が公募して行われた、所外の方を中心とする研究プロジェクトに関するもので、今回はその中から3つを取り上げて成果を紹介していただきました。もう1つは、国立国語研究所研究情報発信センターの公開データに関するもので、国語研の持つ資料の利用のしかたについてもご案内しています。合わせて、研究者コミュニティーに利用していただく大学共同利用機関としての国語研の役割を示そうとしました。領域指定型の研究プロジェクトは多岐にわたっており、国語研の研究の裾野の広がりについても知っていただけると幸いです。このほか、エッセイではプロジェクト共同研究員でもある定延先生にご寄稿いただきました。

表紙は、国語研がオンラインで公開している『言語学レクチャーシリーズ』のスクリーンショットで、これも別の意味で「開かれた国語研」の姿を示すものです。YouTubeで「言語学レクチャーシリーズ」と検索することで、簡単にそのサイトに行くことができます。ほかにも国語研の活動を紹介するビデオなどがありますので、合わせてご覧ください。

研究者紹介では、最近着任された方（五十嵐先生）と、この3月で退職される方（木部先生、野田先生）を取り上げました。研究が新しい世代へと引き継がれていることを垣間見ていただければと思います。木部先生と野田先生、そして前号で取り上げた熊谷先生にとっては、コロナ禍で対面の機会が持てないままでの退職となりました。これまでの国語研での大きな貢献に感謝しながら、編集後記といたします。

（松本　曜）

※次号（vol.10）は2021年9月頃発行予定です。

国語研
ことばの波止場
vol.9

2021年3月31日発行

編集　国立国語研究所研究情報誌編集委員会
［柏野和佳子（委員長）　井上文子　小木曽智信
福永由佳　横山詔一　松本曜］

発行　大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
電話0570-08-8595（ナビダイヤル）

協力　くろしお出版

デザイン　黒岩二三［Fomalhaut］

https://www.ninjal.ac.jp/
©National Institute for Japanese Language and Linguistics